私の個人伝道

２０１６年4月８日
佐々木正明

始めに

　昔はよく個人伝道をやったものです。高校一年で救われて、すぐに個人伝道と言う大切な働きを教えられ、所かまわず、誰彼の見境もなく、ただやみくもに、「イエス・キリストはあなたの罪のために死んでくださいました」と、語りかけたものです。その結果、どういう弾みか、それがきっかけで信仰を持ち、のちには牧師になった人まで現れました。結構有名になって、本まで出しています。でもそれは、私の個人伝道が成功したのではなく、たまたま彼の精神状態が、ちょっとしたきっかけで信仰を持つ状態になっていたに過ぎません。

　だから、そんなことがいつも起こるわけではありません。かえってほとんどの試みは、見るところ何の収穫もない失敗に終わり、むなしさでいっぱいになったものです。だからといって、クリスチャンになりたての時に教わった、「個人伝道の大切さのトラウマ」は、そんなことで消し去ることが出来るほど、生易しいものではありませんでした。失敗に失敗を重ねてついに疲労困憊し、やっと思い切って投げ出すことが出来るまでには、１０年近くもかかりました。われながら、学びの遅い人間だと思います。

　ただ、牧師になり宣教師になると、もっぱら説教だとか伝道方策だとかに忙しく、いつの間にか、以前のように、一人の人間の魂の大切さを考えることも少なくなり、個人伝道のトラウマも残滓となって、頭の片隅の奥の方にこびりついているだけになり、めったに思い起こすこともなくなったのが、精神衛生上は良かったと思います。

　ところが、それから５０年以上も過ぎた昨年、私はまた個人伝道の機会に遭遇したのです。しかも今度は、並行して３人です。私はすでに、「神・罪・救い」という道順をたどる、あの伝統的な伝道法には別れを告げていました。「イエス・キリストが、私たちの罪のために十字架にかかって、死んでくださいました。このキリストを信じるだけで、他に何もしないままでも救われるのです」と、しょっぱなから語りだすあの福音伝達法は、語る方にも聞く方にもあまりにも難しく、「絶対に成功しない」と思うようになっていました。少なくても、失敗をくり返して悟ったことです。

　そこで今回は、宣教師の働きに区切りをつけて、日本に帰って来てから改めて日本の文化、日本人の宗教観、神観、信仰観を学び直し、思い至った個人伝道法を試してみることにしました。それがどのようになったか、できるだけ簡潔に、しかも内容は正確に・・・と言っても簡潔にしたり、会話を文章化したりしながら・・・、今も個人伝道に情熱を燃やしておられるクリスチャンたち、あるいは、私のように個人

伝道に失望して匙を投げてしまいそうになっている方たちに、お話ししたいと思います。いくばくかの示唆になれば幸いです。3人が3人とも同じような経過をたどり、キリストを救い主と信じる信仰に到達したのは感謝ですが、今回は、１人の女性の伝道記録を紹介いたします。

賢子さんへの個人伝道

賢子さんは５０を少し超えたと見える方でした。１０年以上も前から膠原病を患っていましたが、今回ここに入院しているのは、どこかの有名病院でやってもらった、臓器の手術が失敗して治る見込みがなく、自分が住んでいる市に移ることになったからだということでした。非常に衰弱していて、話どころか、息をするのも苦しそうでした。一週間に一度の訪問でも、何も話すことが出来ずに、お祈りだけをして帰ることも一度や二度ではありません。話すことが出来たとしても、たいてい五分か十分程度で、三十分以上話せたのは数回だけです。

彼女を訪問するようになったのは、私が牧会する小さな教会の、女性信徒の一人が紹介してくださったからです。保険の外交員をしているこの信徒は、顧客の一人だった賢子さんが、病院で悲惨な状況に陥っているのを見て、何とかして彼女に希望を持ってほしいと、私に「訪問して福音を伝えてください」と言ってきたのです。自分で福音を語ることが出来ない信徒に、もどかしさを感じながら、私は賢子さんを訪ねました。教会では、わかり易く福音を伝える手順を幾度も教えていたつもりなのに、この「わが教会では優秀な信徒」には、まだまだそれができないでいたのです。

訪問第１回目

賢子さんは、見るからに憔悴していました。

「あなたがお入りになっている保険の外交員が、私が牧師をしている教会に出席していまして・・・・、あなたのためにお祈りくださいとリクエストを出されました。それから私にも、あなたを訪ねてお話ししてくださいと、おっしゃるので、失礼も省みずこうしてお訪ねいたしました。」

「そのことにつきましては、伺っております・・・・。」

ベッドの上で目も開かないままに、消え入るように答える彼女を見て、一瞬、私は、彼女の命があまり長くはないと感じました。それで、前後関係の説明も省略して永遠の命のお話をすることにしました。

「私が信頼している天と地の造り主であり、人間をもお造りになって生かしてくださっているお方は、

信頼してくる人には誰にでも、永遠の命を与えてくださいます。その上、この永遠の命は、単に無限に生き続けるというだけではなく、完全な肉体と完全な心を与えられて、痛みも悲しみも叫びも涙もなく永遠に生きる、素晴らしい命です。」

賢子さんには何の反応もなく、ただ懸命に痛みに耐えていることだけが見て取れました。

「今日は初めてお会いしましたが、あまり具合が良いようにはお見受けしませんので、長いお話はいたしません。ただ、何も分からなくても結構ですから、このお方に頼ってごらんなさい。かならず、あなたにも素晴らしい人生が訪れますよ。『天と地をお造りになったお方にお願いします』と語り掛け、自分の願いをなんでもお話ししてください。」

痛々しい彼女の姿に、なかば個人伝道をあきらめながら、私は彼女の痛みを和らげてくださるように、また永遠の命を与えてくださるように祈り、別れを告げました。

この最初の訪問の日から、私は、筋道をつけて語る話の内容とは別に、訪ねるたびに、挨拶がわりに永遠の命についてお話ししました。死んでも生きることができるのだとお話しして、彼女を励ます努力を続けたものです。十字架の上で、今はの際の死刑囚の薄氷のような信仰に、救いをもってお応えになった、イエス様の憐れみを思い出し、何も知らない彼女のなかにもイエス様の憐れみに触れる、小さな信仰が生まれることを期待したからです。

訪問第２回目

「いいえ。私は、神様についてお話に来たのではありません。」

「キリスト教の神様についてのお話ですか？」

弱々しく尋ねる賢子さんに、私は答えました。

「日本人にとって、神様と言うのは八百万の神々や、神話に出てくる神々、それから、いろいろな神社に祀られている神々ですが、私は、そのような神々のお話をしようとして、来たのではありません。そのような神々の中に、外国から連れてこられた、キリスト教の神を加えるお話など、賢子さんには何の益にもならないと思います。」

ちょっといぶかしげな顔の賢子さんに、私は続けました。

「私がお話ししたいのは、賢子さんが日本人の一人として、たぶん、小さいころから心の中に感じてこられたのではないかと思う、大切なお方についてです。どう説明したら良いのか分からないし、なんてお呼びしたらいいのかさえ分からないのに、心の奥深くで、かすかに、しかも確かに感じてきた、大きく、優

しく、力強く、気高く、恵み深いお方についてです。」

目を閉じたままの賢子さんの顔に、聞いている微かなしるし見ながら、続けました。

「私はキリスト教の牧師ですが、私が信じ頼っているお方は、賢子さんだけでなく、多くの日本人が、昔から、心の奥でかすかにそしてたしかに感じて、良くはわからないままにも、崇めてきたお方だと考えています。ですから私は、まったく知らない神様を賢子さんに紹介して、この神様を信じるように、宗教を変えるようにと、勧めようとしているのではありません。」

このとき賢子さんは目を開け、黙って不思議そうに私を見つめるだけでした。

「賢子さんも日本人の一人として、いろいろな神々を知っておられたはずですし、そのような神々に願掛けをしたことも、お祈りをしたこともあるかも知れませんね。でも、理性で考えても、そのような神々を、自分が崇め、敬い、礼拝するべき対象であるとは、考えてもみなかったことと思います。たとえ願掛けが叶い、祈りが聞かれても、『ありがとうございます』と言いはしても、尊敬と憧れをもって、礼拝を捧げることはなかったことでしょう。」

再び目を閉じられた賢子さんの表情に、素直に聞いてくださっていることを感じて、さらに続けました。

「それが多くの日本人の感覚です。日本人はよく、八百万の神々を信じていると言われていますが、それは、日本人の宗教観のきわめて表層的で浅い理解、あるいは通俗的な表現にすぎないと思います。私がお話ししたいのは、そのような神々ではなく、賢子さんも大多数の日本人と同じように、「ふとまじめになったとき」に、かすかではあっても確かに感じてこられた、目に見えない大きなお方についてです。太陽を昇らせ、雨を降らせ、緑の山を与え、青い海を備え、その中に多くの植物や獣や鳥、そして魚や貝などを生かし、私たちに与えてくださっている、恵み深いお方についてです。」

明らかに、私の話に興味を持っておられるように、　賢子さんは目を閉じたまま、黙って聞いておられました。

「この、目に見えない、大きな恵みにあふれたお方が、私たちを造り、命を与え、食べ物を与え、生かし続けてくださったのです。私たち日本人は、昔から、たとえおぼろげではあっても、そのお方を心の奥深くで感じて、よくは分からないままにも、感謝をささげ、自分たちのやり方で崇めてきたのです。」

賢子さんの様子に、疲れがにじみ出て来たのを見て、私は話を切り上げ、彼女の祝福と永遠の命のために祈って、別れを告げました。

「どうぞ、来週の訪問の時まで、彼女を生かしておいてください。」

　そう祈りながら、エレベーターに乗ったものです。

訪問第３回目

　病室が変わった彼女を探すのに手間取って、やっと見つけたところが就寝中でした。妻が持って行った花を、看護師にいただいたコップにさして、そっと置いてきました。

訪問第４回目

　「退院されましたよ」

　看護師の言葉にがっかり・・・。でも、しょうがありません。

「紹介してくれた泰子さんに住所を訊いて、近いうちに訪ねることにしよう・・・・。」
雨が激しく、病院の大きなガラスを叩きつけていました。

訪問第５回目

「あの、青い壁の家だよ。きっと・・・・。」

　カーナビの付いていない車で見当はずれをくり返したあと、とうとう見つけました。

「呼び鈴を鳴らしたんですけど・・・・、だれもいらっしゃらないみたい・・・・。」

　だいぶ長い間玄関前にたたずんでいた妻が、戻ってきました。

「たぶん休んでおられるか、聞こえていても、玄関まで出てくることが出来ないのかもしれないね。」

「今度は、ご主人が仕事から帰ってきたころを見計らって、来てみましょう。」

　子供がいないと聞いていましたので、賢子さんが独りで休んでいては、お会いするのは難しいと判断して、妻と私は次の訪問先に向かいました。

訪問６回目

　呼び鈴を押しても、何の応えもなく、携帯で呼んでみても返事がありません。

「ご主人が、仕事から戻って来ている頃合いだとは思うのだけど・・・・。」

　諦めて帰ることにしました。

　訪問７回目

　妻が押した呼び鈴に、髪の毛こそだいぶ後退していましたが、逞しく日焼けした男性がそっと顔をのぞかせました。訪問の事情を話すと、奥様の賢子さんはずっと具合が良くなく、『寝たっきりです』と小声で話してくださいました。

「普段は毎日２時間ほど介護の方が来て、身の回りの世話をしてくれるので、自分は毎晩７時過ぎまで仕事です。佐々木とおっしゃる牧師が、いつも病院を訪ねてくださり、いろいろな話を聞かせて励ましてくださっていると、家内から良く伺っています。本当にありがとうございます。体の具合さえもう少し良ければ、私が教会に連れて行けるのですが・・・・・。」

　夕闇の中で、ご主人はとても丁寧に挨拶をしてくださいましたが、賢子さんにお会いすることはできませんでした。ただ、ご主人が私たちのことを聞いていて、迷惑とは思っておられないことを喜びながら、お暇しました。

　訪問第８回目

「大変でしたね。まだ痛みますか？」

　以前と同じ病院の、違う病棟に賢子さんを訪ねて、開口一番に訊きました。そして、我ながらまずい訊き方をしたものだと、心の中で悔んだものです。彼女の顔には、痛みがありありと現れていたからです。

「昨日、お宅までお伺いしたところ、近所の方から、賢子さんが転んで大腿部を骨折して、前と同じ病院に入院されたと聞いたものですから、驚いてやってまいりました。」

「骨折の痛みは、鎮痛剤が利いていて今は痛くないのですが、以前からの痛みがどうしても取れません。でも、もっと詳しくお話を伺いたいと思っておりましたので、今日は、どうか・・・お聞かせください。」

その言葉に少しほっとして、励ましをと慰めの言葉をかけてから、本題に入りました。

「前回は、私が信頼し、お祈りをしているお方は、たぶん、日本人の一人として、賢子さんも昔から心の奥でかすかに感じ、良くは分からないままにも、崇め、感謝を捧げて来たお方だとお話ししましたね。私が話していることに、納得していただけるでしょうか？　賢子さんは、心の奥深くで、良くは分からなくても、また、かすかではあっても、日本語で言う神様とは何か違う、もっと気高く、大きく、優しく、恵

み深いお方を、感じて来られなかったでしょうか？」

「はい。そういえば、私も、普通の日本人として、八百万の神々や、たくさんある神社や祠にいると言われる神様に、お願いごとをしたことはあります。でも、そのような神々と、私の心の奥深くで、かすかに感じているお方は、別の存在のようにも感じます。私はこんな体ですから、かえって、生きている事に、いえ、むしろ、誰かに生かされていることに、感動することがあります。そんな時、思わず手を合わせて感謝をしたのも、一度ならずありますが、それは、八百万の神々や神社の神様にではなく、なんて表現していいのか良くわからないのですが、私の心が密かに感じている・・・・・あえて言えば、気高く、尊く、情け深く、恵み深く・・・・大きなお方。何の根拠もなく、説明もできないのですが、私の心がおぼろげに知っている・・・・・そんなお方に、手を合わせていたのだと思います。」

「そうでしたか。賢子さんもやはり心のどこかで、そのような尊いお方を感じながら、生きて来られたのですね。たとえば日本人は、大抵、食事の前には『いただきます』と言いますが、あれは食事を出してくださった方、あるいは作ってくださった方や、作物を作ってくださった農家の方々に言っているだけではなく、その背後で作物を育て、私たちに食べさせてくださっている、大きな力を持っておられるどなたかに、感謝の心を表現しているのだと、思われませんか？　私は、多くの日本人が同じような感覚を持ち、同じような体験をしているのではないかと思います。ただ、その、かすかに心に感じるお方が一体誰なのか、なぜ感じるのか、どうしてあまりにもうっすらとしか感じられないのか、何もかも良く分からないために、ついつい、目に見える姿を持つ八百万の神々や神社に祀られている神々に、お祈りしてしまうこともありますね。それでいながら、心のどこかで、なんて言うか、本能的に、『これは違う・・・。本物じゃない』などと感じてきたわけです。」

「私も、結構、宗教的なところがあって、子供のころからお宮参りをしていました。でも、八百万の神々を本物の神様だと思ったことは一度もありません。神社に祀られている神々が、本当の神様だと思ったこともありません。でも、そこに祀られているいろいろな神々の背後に、真実の神様と言うか、気高く大きなお方がいらっしゃるのではないかと感じて・・・・、そうです、感じてです。決して、考えた結論ではなく、そのように感じて、思って、手を合わせてきました。」

「日本人って、とても面白いですね。確かに神社に行って、そこに祀られている神様に祈るのですが、その神様がどんな神様であるかには、ほとんど関心がありませんね。どこの神社にお参りをしても、まったく同じ気持ちで手を合わせます。厄除けの神様だ、受験の神様だ、縁結びの神様だと、特別な役割を持たされている神様もあるようですが、参詣する多くの人たちにとっては、そこに祀られている神様が大切なのではなく、その背後に隠れておられるお方、その後ろに潜んでおられるお方こそ、尊く、大きく、私たちが手を合わせるべきお方だと、なんとなく、感じているのです。」

「私は、あまり考えたこともなかったのですが、確かに自分はたくさんの神々にではなく、いつも心の中に感じている、優しく、大きなお方に手を合わせてきたと思います。そのお方を『神様』とお呼びするのにも、少し抵抗があります。」

「日本人の宗教感覚、あるいは宗教意識と言うべきものからすれば、そのあたりはとにかく曖昧ですね。多くの神々を信じていると言われながら、日本人はおしなべて、神々と言われるものなど、信じていないのではと思われます。例えば深い山に入り、見事な大木を見ると、そこにしめ縄が張ってあったり、淡い光の中に流れ落ちる滝のわきには鳥居があったり、苔むす岩々に触れてふと脇を見ると、そこに祠が置かれていたりします。多くの日本人は、それらの中になにか神々しいものを感じます。でも、それらのものを神様と言うのは、あまりにも安易で通俗的な気がします。それらのものの背後に、あるいはそれらのものの内に、気高く、尊く、大きく、優しく、強いお方の存在を感じていると言った方が、納得できます。」

「確かにそうですね。私も、そのような場所でしめ縄が張られていたり、小さな社が建てられていたりすると、たいてい、手を合わせてきました。大木や滝や山や川が神様だと思ったことはないのですが、そのようなものの中に、大切で、尊い、どなたかが潜んでおられると、感じていたからだと思います。」

「そうですね。日本人の多くは、そのような感覚をもって生きていると思います。あらゆる自然物に気高い存在が宿っておられると、本能的に感じているわけです。ただ、それを上手に説明することはできません。それで、安易に、すべての自然物を神々に仕立ててしまうこともあるわけです。でも賢子さんは、すべての自然物に多くの神々が宿っておられると、感じていたのではないようですね。むしろ、良くは理解できておらず、説明しようなどとは、お考えになったこともないだろうと想像するのですが、いま、考えてみると、いかがでしょう。賢子さんは、多くの自然物に宿っている、多くの神々を感じていたと思いますか？　それとも、すべての自然物に宿っておられる、一人のお方を感じていたと思いますか？　もしかしたら、大多数の日本人が心に感じている大きなお方は、たくさんの神々ではなく、唯一のお方、ただ一人のお方なのかもしれませんね。」

賢子さんは少し目を開き、思いをめぐらせるように、天井の一点をみつめながらお答えになりました。

「一人のお方というか、同じお方と言うべきかわかりませんが、たくさんの神々ではなくて、むしろ、ただ一人のお方、同じお方が、すべての自然物に宿っておられる・・・・・と感じていたと思います。」

期待していた答えを聞いて、励まされたように感じた私は、さらに続けました。

「そこが大切ですね。私たちが持っている高度な宗教感覚では、お一人のお方、同じお方が、すべてのものに宿り、すべてのものの背後にいらっしゃると感じるのですが、その同じ私たちが、すこし世俗化というか、安易な宗教心に流れて、自分が感じているお方について説明しようとすると、たちまち、多くの神々という言い方になってしまうわけです。日本中いや世界中に、時間と空間とを超えて存在するなど、人間の常識と体験を超えていて、心で感じたとしても、理屈では説明できないからです。そこから、人間社会と同じような、神々の世界が想像され、おどろおどろとした神話が生み出されたりもします。」

「たしかに、ほとんどの日本人は、おっしゃるようにこの二つの宗教心というか、高度な宗教感覚と安易な宗教理解を持っていて、なにか、使い分けているようなところもありますね。」

「そうですね。だから同じ人が、ある時は何々の神様と言われる神様に願掛けをしていながら、同じ口で、『神なんて存在しない』と平気で言えるわけですね。そのようなものは神様ではない、自分が尊んでいるのは、もっと気高く、優しく、自分を生かしてくださっている、良く分からない大きなお方なのだと、心の奥底では感じていながら、日常の中では、いろいろな神々を認めているところもあるわけです。

「神と言う言葉が、とても曖昧ですね。」

「その通りです。心で感じている目に見えない大きなお方は、人間の理解力をはるかに超えたお方ですので、そのお方について語ろうとすると、限られた理解力でも説明できる『たくさんの神々』になってしまうのかも知れませんね。ですから私も、個人的に、『神様』という言葉をあまり用いたくないところがあります。『神』と言う言葉は小さな、小さな、人間の頭が想像することが出来る程度のものだからです。私たちが信頼しているお方は、天と地をお造りになった大きな力あるお方で、人間の想像力をはるかに超えたお方だからです。そのため、このお方を『神様』とお呼びするには、少なからず抵抗があるわけです。『神』という日本語は、もともと『うえ』という意味で、普通の人間よりいくらかでも力があったり、能力があったりするものをなんでも、人間より上と言う意味で『かみ』と呼ぶからです。料理がうまければ料理の神、野球がうまければ野球の神という具合ですね。最近はスケートの神様だとか、神対応などと言う言葉も流行っていますね。昔は、人の上に立つと思われていた役所は、『おかみ』と呼ばれていましたし、お殿様は『・・・の頭』、あるいは『・・・の守』と呼ばれていました。人の上ですから『かみ』なのです。頭に生える毛は上の毛ですから『髪の毛』、うちの奥さんは偉い人ですから、『おかみさん』です。

「ええ！？　そういう意味なんですか・・・？」

　ちょっと驚く賢子さんの笑顔に、私は続けました。

「ですからたとえば小さな動物でも、何らかの面で人間よりも優れた力があると考えられれば、神様になれるわけです。子供のできない女性からすると、子だくさんの犬やネズミは神様になれるのです。でもそのような神々を、私たちの心で感じて来た、あの気高く、大きく、強く、恵みにあふれたお方と、一緒にすることはできません。私が信頼している、『天と地の造り主』と同じレベルと言うか、同じ次元で語られても困ります。」

　仰向けに寝たまま、私の話を促すかのように、わずかに頷きながら聞いておられる賢子さんに安心して、更に続けました。

「私は、日本人が昔からかすかながらも感じて来た、尊く、気高く、大きく、優しい、目に見えないお方

こそ、キリスト教の牧師である私が信頼している、「天地をお造りになったお方」だと信じています。ただ、日本人はこのお方を理解しているわけではありません。本能的に感じて来たのです。賢子さんもおっしゃったように、本当に、感じて来ただけです。また日本人は、無理してそのお方のことを理解しようとも、考えなかったようです。このお方が、あまりにも気高く、大きく、人知を超絶していると感じるために、考えることを諦め、ただ崇め、尊んで、感謝を捧げて来たという一面があるのです。大きな尊いお方を、理屈で説明できるとか、言葉で理解してもらえると考えるほど、日本人は愚かではなかったということでもあります。あるいは、ギリシヤ的な思考に慣らされた西欧人のように、とことん理屈で詰めて行くことが苦手で、あきらめが早いともいえるかも知れませんね。とにかく大多数の日本人は、自分たちが心で感じている、高く、深く、広いお方を、学問で究めようなどと、大それたことは考えもしなかったのです。そんなことは、思い上がりもはなはだしいと、感覚的に悟っていたと思われます。」

「そのような気高い方を心に感じているのは、日本人だけでしょうか？　他の国人たちというか、他の民族というか、日本人ではない方たちは、私たちのようには感じていないのでしょうか？」

「決して日本人だけではないと思いますよ。人間であればだれでも、感じるのではないかと思います。ただ、いろいろな理由で、日本人は特にその感覚に優れていると思われるのです。」

　私は、ここで非常に重要な事柄に踏み込むことにしました。

「天と地をお造りになったお方が、私たち人間に与えてくださった聖書と言う書物には、このお方が人間をお造りになったとき、人間だけを、ご自分に似せてお造りになったと書かれています。このお方は霊的な存在者で、あらゆる意味で無限のお方ですから、有限な人間の目には見えません。ですから、ここに記されている「似せて」と言う言葉は、顔かたちや姿のことではありません。このお方の本質的な性質である、霊的なあり方です。つまり私たち人間は、この第三次元の世界に生かされている有限なものですが、唯一、霊的な次元、別の次元を感じ、ある程度それを理解できる能力というか、性質を与えられているということです。ところで突然ですが、賢子さんは、猫がお祈りしているのを見たことがありますか？

　「え、猫ですか？ 見たことがありません。」

　　賢子さんは、わずかに白い歯を見せながら答えてくださいました。

「そうですよね。猫や犬がお祈りすることはありません。あらゆる動物の中で、人間だけがお祈りをします。人間だけが、第三次元以外の次元のことを感じ、自分をお造りになった目に見えない大きなお方を、本能的に感じるようにされているからです。感じる能力が、与えられているのです。ただその能力が、今は旨く機能していないために、自分を造ってくださった恵み深いお方のことが、ほとんど分からなくなってしまったのです。でもこのお方を礼拝したいという気持ち、このお方に感謝を捧げなければならないという心は、本能として残っているために、世界中のどの時代のどの文化の人にも宗教心があるわけです。でも、このお方のことがよく分からなくなってしまって、このお方の代わりに、おかしな神様を作

り出して拝んだり、幽霊だとかお化けだとか妖怪だとかを空想して恐れたりしています。幽霊がいるのではと怖がるのは、人間だけですよね。猫が幽霊を怖がっていては夜遊びが出来なくなりますね。」

「前に、うちで飼っていた猫は、夜遊びが大好きで困りました。毎日朝帰りで、日中は寝てばかり・・・・。」

「いま我が家にいる猫も、夜遊びが大好きです。幽霊などを想定して、気味が悪いし怖いから夜は出歩けないなどと言うのは人間だけです。霊的な性質を持っていながら、すっかり迷いの中に落ち込んで、様々な霊的現象を空想しては怖がり、恐れているためですね。」

「そういえば、私の父も、とても強いしっかりとした人間だと思っていましたが、可笑しなことに、幽霊が怖くて、夜は一人で寝られなかったんです・・・・。」

「世界中のすべての人間が、人間である以上、たとえ非常に希薄で曖昧ではあっても、日本人と同じように、自分を創造して下さったお方のイメージを持っていて、そのお方を礼拝したいという気持ちを持っています。でも、大方の人々の意識はあまりにも希薄で、曖昧模糊としているために、自分勝手な神々を作り出し、様々な偶像を作成して拝んでしまうのでしょうね。その傍らでは、幽霊や悪霊、死霊や背後霊などと訳の分からないことを言って、一方では弄び、もう一方では勝手に恐れています。たいていは、『幽霊の正体見たり枯れ尾花』となるわけです。」

「人間すべてに、そして人間だけに、霊的な性質が与えられ、私たちをお造りになった天地の造り主を、感ずる能力があることが分かりました。」

「ただし、これは単に感ずる能力だけではありません。これは、造り主と交わる、あるいはお話をする、意思を通じる能力があるということなのです。だから、人間は祈り、造り主はその祈りに応えてくださるのです。」

　ここで賢子さんは、おずおずと切り出しました。

「さきほど、日本人は特に、造り主である方を感じる能力に、優れているというようなことをお話になりましたが、それはどういうことでしょか？　どうしてそのようなことが言えるのでしょう。」

　話が順調に進み、賢子さんもしっかりと聞いて、的を射た受け答えになっていることを喜んで、更に話を続けようとしましたが・・・。

「〇〇さぁ～ん。診察のお時間でぇ～す。診察室に行く準備をしてくださぁ～い。」

　突然、看護師の声がかかって、今日はこれまでとなりました。急いで、

「どうかいつも、天と地をお造りになったお方にお祈りし、感謝と願いと賛美を捧げながら生活してください。天と地をお造りになったお方は、必ず賢子さんのお祈りに応えてくださいますから。」

　と、私。

「ええ。この頃は毎日、朝晩にお祈りしています。私自身、自分の中に大きな変化を感じています」

看護師さんの気配を後ろに感じながら、短くお祈りをしてお別れしました。

訪問９回目

　賢子さんは、大きなリハビリ専門病院の、個室に入っていました。骨折後のリハビリと言うことで、病院を移られたようです。ただ実際のところ、素人目にも、もう立って歩くことなど、思いもよらないという状態なのですが・・・・。どうやってリハビリをするのか・・・・・？

「こんにちは。ここは個室なので、落ち着いてお話ができますね。」

　窓の向こうの明るい梢から、ゆっくりと目をはなして、賢子さんは弱々しく口を開きました。

「ええ。いつもありがとうございます。ここですと、他の患者さんに気兼ねせずにすみます。」

「それに、今日は顔色も良いようですが・・・・。」

　ほんとうは、特に顔色が良かったわけでもなかった・・・・のかも知れません。ただ、窓からの光が部屋を明るくして、一瞬、彼女の顔をさわやかに見せたのです。

「はい。今日はゆっくりお話が聞けそうです。」

「前回はたしか、日本人は天地をお造りになったお方を感じる感覚に、特に、優れているのではないかと言うところで、中断していましたね。そこからお話ししましょうか。

　少なくても、調子が悪くてお話しできない賢子さんではなかったことを、感謝しながらお祈りを済ませ、「個人伝道」を再開しました。

「世界中の民族や国々の人を、みな調べてのお話ではありませんが、元宣教師として、様々な国のいろいろな民族の代表者たちと、ずいぶんお話しする機会がありました。様々な文献に目を通すこともできました。それで言えるのですが、日本人の心には、日本人自身が気づかないままですが、天地をお造りになったお方の性質が、特別に強く残されていると思います。それは日本人の倫理観や道徳観となって現れ

て、世界でもまれな、最も進んだキリスト教諸国にも引けを取らないほど、平穏な落ち着いた社会を作り上げています。多くの国々の人たちが、口をそろえて賞賛しているほどです。」

「そのような話は、テレビや雑誌の報道を観ても、良く取り上げられていますね。」

「もちろんいろいろな反論も、例外的な出来事もたくさんあります。私が見ていても、おかしな日本人感覚、絶対に納得できない日本人独特の考え方、日本人らしい醜さもあります。海外で長い間活動して来た私などには、『もう嫌だ！ 日本人なんかと付き合いたくない』と思うことさえあるんですよ。それでも日本人の倫理感、道徳観の高さは、世界の人々が認めていると言えるでしょう。ずいぶん昔のこと、そうですね 1970 年代の初めだったと思いますが、イギリスのある調査機関が、「世界のクリスチャン度」と言うものを発表したことがあります。それによると、世界で一番クリスチャン的な国は、日本だというのです。クリスチャンの数という点では日本はもっとも低いのですが、社会の平穏さ、人々のものの考え方、判断基準、価値観、倫理観など、あらゆる角度から総合的に評価すると、いちばん聖書の教えに近い生き方をしているのは、日本人だということです。ふつう最も進んだキリスト教国と言われる北欧の国々でも、イギリスでも、ドイツでも、アメリカでも、イタリアでもなく、神道と仏教の国、日本だというのです。」

「詳しいことは知りませんが、確かに、大航海時代に植民地にされて、カトリック化された中南米の国々や、アジアではフィリピンに行くときでも、治安が悪いから、強盗や万引きが多いから気を付けるようにと言われますね。それだけでなく、ヨーロッパのキリスト教の国々に行くときも、アメリカに行くときも、日本のように無防備で歩かないように言われますね。安全とか倫理と言う面では、日本は特別なのですね。江戸時代の日本では、女性が独りでかなりの遠出をしていましたが、同じころのイギリスでは、せいぜい 2 キロくらいが限度だったそうです。長いあいだ病院生活をしている私は、そこまでさえも出歩けないものですから、テレビや雑誌ばかり観ていて、雑学が増えました。」

「どこの国にも、素晴らしい人格を持っている人はいます。親切で心優しい人はどの文化にも存在します。安全な社会もどこかにあるでしょうね。ただ、日本は特別なようです。そこが大切です。」

「どうして、そんなことになっているのでしょうか？」

「それは、とても良い、そして大切な質問だと思います。日本人の宗教観、倫理観、社会の治安などからの推論に、聖書の教えからの推論を重ねると、そのように言うことが出来ると思います。推論ですから、絶対の確証があるわけではありません。物理や数学の世界ではありませんので、確実な証明は不可能です。でも私は、かなり高い確率でその推論が正しいと考えています。」

　ときおり、痛みに顔をしかめることがあっても、とても熱心に耳を傾けてくださっている賢子さんの様子に励まされて、さらに続けました。

「キリスト教の世界では、聖書を神様からの律法（戒め）と理解して、その戒めに反することは罪と考えます。ところが、その聖書の戒めはユダヤ人とキリスト教徒に与えられたものであって、それ以外の人たちに与えられたものではありません。その聖書の中に・・・・、ここが大切なところなのですが、ユダヤ人やキリスト教徒以外の人たちにも、天地を創造されたお方からの、基本的な律法が与えられていると教えられています。それが今まで話してきた、私たちの心の奥にある、目に見えないお方に対する恐れと尊敬の念です。造り主である方に似せて造られた性質です。これが、基本的な、あるいは原則的な律法となって、キリスト教社会以外の社会でも、良い秩序が保たれ、良心的で安全な生活が営まれるようになっているわけです。いわば聖書のように、文字で書かれた律法ではなく、心に書き記されている律法です。」

「日本人のように、ユダヤ人でもキリスト教の信徒でもない人々にも、聖書ではない戒め、文字で書かれた戒めではない、心に書かれた戒めが与えられていると、文字で書かれた戒めである聖書に教えられているのですか？ なにかとてもややこしい言い方になりましたが・・・。」

　賢子さんは、とても頭の良い人なんだと、改めて思いながら続けました。

「その通りです。多くのクリスチャンたちは気づいていませんし、気づいていてもその大切さを理解していませんが、そのように聖書に教えられているのです。」

「・・・クリスチャンではなかった私たちにも、同じ天地の造り主から律法が与えられていて、私たち日本人は、その心に書き記された律法を大切に守っていると言うことですね。たぶん、多くのキリスト教諸国の人々が、聖書の教えを守ろうとする以上に・・・。」

「そういうことです。文字で書かれた律法、つまり聖書の大切さは、まず、心に記された律法ではよく分からない、天地を創造されたお方のことが、詳しく教えられているところです。次に、そのお方が人間のために準備して下さった救いの御計画と、その遂行について詳しく記されていることです。その文字で書かれた律法によりますと、人間の道徳的腐敗には二つの理由があります。第一はクリスチャンならば誰でも知っていますが、アダムとエバという人類の祖先の罪によって、人間が造り主である神から離れ、悪魔の支配に陥り、罪に縛られて生きるようになり、行き着く先が死になってしまったという物語です。いわばこれが第一の堕落で、基本的なものです。

「アダムとエバのお話は、ほとんどおとぎ話のように、多くの人たちに知られていますが、あれを本当のお話とお考えなのですか？」

ちょっと驚いた反応をした賢子さんにお答えしました。

「アダムとエバの話は、今から 3 千数百年も昔に、難しい本質的なことをその当時の人々にわかり易く語り伝えようとしたもので、現代人の語り方、あるいは教え方とは違うかもしれませんが、本質を正しく伝えているものと考えています。」

「そんなに昔に書かれたお話だったんですか！」

「そうです、そんなに昔に、当時の人たちにわかり易い語り方で、理解されやすい方法で書かれているのですから、現代人が不注意に読むと、おとぎ話だと思ってしまうことがあるわけですね。・・・それで、もとにもどって・・・。」

「はい。ごめんなさい。話の腰を折ってしまいました。」

「第二は、第一の堕落から派生して来た、偶像礼拝の問題です。たとえ、第一の堕落によって造り主を離れしまっていても、造り主のことがまったく分からなくなったのではありません。事実、造り主は、ご自分のことを知らせようと、自然を通して絶えず人間にそのお姿を現してくださったと、聖書は教えています。それにも拘らず、人間はその栄光に富んだ造り主の姿、目に見えない永遠の姿を、目に見える人間や鳥や獣や地を這うものの姿に変えて、偶像を造り、それを拝むようになってしまったのです。」

「人間が、誰かを礼拝したいという本能ですね。本能はあっても、礼拝の対象と言うか、礼拝すべきお方がよく分からなくなっていた・・・・ということですね。」

「そういうことです。ただ、人間をお造りになったお方は、人間が、少なくても見えない造り主を崇めるべきだとお考えになり、それがわかるように、ご自分を現わしてくださっていたと、聖書には書かれています。それなのに、それにも拘らず・・・ですよ。人間は様々な形の偶像を作り出して、これを礼拝したのです。そこで造り主である神は、この愚かでかたくなな偶像礼拝者たちを、自分たちの汚れた欲望のままにお任せになったというのです。これがいわば第二の堕落です。

「第一の堕落の結果は、悪魔の支配にくだり、神を離れた社会を作り、罪の力に縛られるようになって、死を目指して生きるようになったということのように思いますが、第二の堕落の結果はなんでしょう？」

「これは時間的には、第一の堕落の後、あまり時が経過しないうちに起こったことと思いますが、偶像礼拝のために、自分たちの欲望のままに任せられた結果は、聖書によると、まず性的な混乱、同性愛が挙げられています。それから続いて、多くの醜い罪が２１も列挙されています。日本人の優れた倫理観、あるいは平穏な社会などは、ここに関係していると思います。

「第二の堕落、つまり偶像礼拝に関係しているということですか？」

「そうだと思います。実はとても大切なことなのですが、日本人が心に感じているあの大きなお方に関して言えば、偶像と言うものが存在しないのです。日本人の高度な宗教意識は、このお方の偶像を認めないのです。高度な宗教意識を無理やりに説明しようとすると、神々になったり幽霊やお化けや妖怪になったりしてしまいます。神々の偶像が巷に転がり、漫画のネタがあふれています。先にお話ししたよう

に、ほとんどの日本人にとって、それらは「かみがみ」であったり、霊界の存在であったりするだけで、崇めたり敬愛したり、礼拝したりする、崇高なものではありません。かえって、「神なんぞ存在しない」と言わせるもとになっているものです。」

「でも、偶像がまったくないという訳でもありませんね。例えばお隣の佐賀県では、街々に恵比寿様の偶像を見かけますよね。」

「そうですね、恵比寿様のような神々は、通俗的に神話化されたものですね。そのような偶像は、日本中いたるところにかなりあります。人間はやはり、目に見えないものでは満足できず、何とか見えるものにしたいのですね。日本では、特に仏教が入って来て、古来の日本人の神道的感覚と混じり合った後は、偶像が増えたようですね。」

「日本の神々は、仏様をお守りしているのだと、説明がされたこともありましたね。」

「それにも拘らず、日本人古来の宗教的感覚は変わらずに、日本人の多くの心を支配していたと言えます。神道が仏教化した部分より、仏教が神道化した部分の方が多いようにさえ思います。だから、日本の仏教は他の仏教国の仏教とは随分異なっているわけです。よく仏教的な感覚として語られる『わび・さび』にしても、私は本来神道的なものだと思います。他の国の仏教には、そのようなものはありませんから・・・。」

「日本って、神道と仏教の国と言われていますが、仏教は、死に関わる事柄だけを扱うみたいですね。しかも、死についての仏教の教えはとても曖昧で、いまはもう、死んだときだけに関わる宗教と言う感じで・・・・。」

「死んだときだけに関わるというのは、少し言い過ぎかもしれませんが、死者をまつることを中心に、日本の家族や親族の繋がりを保つことによって、社会の基盤を据えている役割があると思います。仏教各派の教えは互いにひどく異なっていて、それを統一するとか調整することは不可能ですが、この死者に関わり、家族と親族の繋がりを保つという、神道にはない役割を果たしていると言えます。」

「仏教は良い宗教でもあるわけですね。」

「良いところもたくさんあると言うべきでしょうか。人間に救いをもたらさないという事では、良い宗教とは言えないでしょう。しかし、日本と言う国において、それなりの役割を果たし、日本の社会の安定化に貢献してきたことは事実だと思います。仏教徒たちにも、人間をお造りになったお方の性質がしっかりと宿っていて、彼らを治める原則的な力として働いていることに、変わりはありません。」

「すべての人間が、造り主から与えられているその基本的な人間性を大切にしていたら、宗教や思想を超えて、もう少し手をつなぐことが出来そうですね。」

「そうですね、『人類に共通な善』を無視して、自分たちの民族や国家や文化あるいは宗教の優位性だけを主張する「原理主義」に走ると、例えば大航海時代に始まったカトリックの植民地主義、その後に力を持ち出したプロテスタント諸国の、植民地政策のような残虐行為も許してしまいます。ＩＳやアルカイダなどに代表される、現代のイスラム原理主義も同様ですね。

「アメリカなども、原理主義的傾向が強いキリスト教が、大きな政治的影響力を持っていると言われていますね。」

「そうですね。しっかりと聖書の教えに立つのは良いことだと思いますが、独善的な聖書解釈によって自分たちの優位性を主張するようになると、恐ろしいですね。それが民族的、文化的、国家的、思想的優越感になり、戦争や植民地化までも許して美化してしまうわけです。アメリカの独善性と言うか欺瞞は、ベトナム戦争を境に、だれの目にもはっきりしてきましたね。アメリカは素晴らしいキリスト教国だと思っていた人は、あれで裏切られ、さらに次々と暴かれるアメリカの国家的犯罪に、失望しているわけです。」

「ヨーロッパなどの伝統的キリスト教諸国でも、近年、若者たちのキリスト教離れが急速に進んでいますね。」

「あれなども、伝統的なキリスト教至上主義の教えが、一人の人間としての自分の人間性から出てくる『良心の叫び』とは、相容れないと感じ始めているからだと思いますね。私が前に、「キリスト教の神についてお話に来たのではない」と申し上げたことは、覚えていらっしゃるでしょうか？」

「ええ。不思議なことを言う牧師だなぁ・・・と思いました。」

「そうですか。覚えていてくださり、ありがとうございます。私は独りよがりの欧米キリスト教が嫌いなのです。私が好きなのは、聖書で教えられている教え。そこに現わされている天地を創造されたお方。また救い主としてこの世界に来てくださった、イエス・キリストであって、ヨーロッパ人の作り上げたキリスト教ではありません。私は、多くの西欧のクリスチャンたちと同じように、聖書に書かれていることを、神からの誤りのない教えであると信じていますが、その理解の仕方が違うのですね。欧米人が理解した聖書の教えでは、キリスト教以外の宗教はすべて悪であって、神の怒りと裁きの対象ですが、私が理解する聖書の教えでは、すべての人間には、造り主であるお方の麗しい性質が与えられていて、それが、人間としての基本的な律法となり、それぞれの文化の中で倫理観となり、道徳律に発展していると言うことです。キリスト教信者やユダヤ人以外の人々は、聖書の教えによって裁かれたり良し悪しを言われたりするのではなく、この、心に記された基本的律法に照らして裁かれるのです。聖書の律法は、ユダヤ人とキリスト教信者に与えられたものであって、他の人たちに与えられたものではありません。ですから、それによって裁かれることがあってはならないのです。」

「それでは、先生の教えておられる教えは、聖書に根差していると言えるかもしれませんが、欧米から教えられたキリスト教の教えとは、だいぶ違うところがあると言うことになりますね。」

「残念ながら、その通りです。特に他の宗教に対する考え方が違います。西欧から輸入されたキリスト教では、キリスト教以外はみな偶像礼拝の邪教、神が憎まれるものですが、私は、すべての宗教は造り主に似せて造られた人間の、本能的欲求の現れ、あるいは表現だと考えています。誰かを礼拝したいというのは、霊的性質を与えられて造られた人間の本能であって、それ自体は悪ではないのです。」

「私も、キリスト教は他のすべての宗教を、憎むべきものと教えていると思っていました。」

「ふつうの日本人にも、そのように理解されているのは、とても残念なことです。それは西欧キリスト教の受け売りであり、間違った聖書の読み方から来る誤った理解です。何かを礼拝したいというのは、人間に与えられた本能であり、赤ちゃんがおっぱいに吸い付くのと同じです。この本能が無ければ赤ちゃんは死んでしまいます。お腹を空かせた赤ちゃんは、おっぱいの代わりに親指に吸い付いたりもします。その行為を罪だと言って叱ってもはじまりません。おっぱいを与えてやればいいのです。」

「知らないのだから、分からずにいるのだから、教えて上げたらいいわけですね。」

「そうです。知らない人をしかりつけて裁きを宣告するだけで、教えて上げないのが悪いのですね。日本人は、天地をお造りになったお方を知らなかったために、そのお方を礼拝することが出来なかったり、そのお方を礼拝するにも、正しく礼拝できなかったりしているのです。ただ、気を付けて理解しなければならないのは、日本人の基本的宗教心の表現である神道には、いわゆる偶像が無いのです。通俗化したり、無理に理屈をつけたりした場合は、偶像の侵入も許すようですが、本来の神道には偶像が無いのです。賢子さんは、神社で神様の像を見たことがありますか？ 無いですね？ 純粋に神道の神社ならば、どこにも神様の像は置いていません。いわゆるご神体と言うものも、神そのものの像ではなく、神を象徴するものにすぎません。

「たしかに、神社には神様の像と言われるものを置いていないようですね。少なくても、私は見たことも聞いたこともありません。」

「日本人は、心で感じている気高く大きなお方を、非常に崇高なお方と感じていますので、このお方を言葉でも絵でも像でも、表現できるなどとは考えないようです。思いもよらないことなのですね。だから神道には、神様をあれこれと説明するキリスト教のような神学がありません。同じように、絵もなく像もありません。ユダヤ人のようにいくたびもくり返して、偶像礼拝を禁じられる必要もありませんでした。」

「日本人は、自分が直感的に感じている気高いお方と言いますか、本能的に感じている大きなお方を、自覚をしないままではありますが、とても大切にしていると言うことですね。」

「だから、『神なんていない』などと平気で言いながら、自分の宗教心を非常に大切にしていて、宗教の悪口は許さないわけです。この偶像を許さない日本人の宗教心は、神から突き放されて自分の欲望のままに任せられたという、第二の堕落をかなり止めているところがあるのではないかと、私は考えています。日本人の偶像礼拝の少なさは、日本人に対する神の怒りを少なくし、日本人の倫理観の高さ、日本社会の治安の良さにつながっているのだと思います。それが日本人を、多くの西欧キリスト教諸国の人々よりも、クリスチャン的な人間にしているのだと思います。聖書の律法も心に記されている律法も、もとはと言えば、同じ天地の造り主から与えられているものですから。」

　ここで突然、賢子さんにひどく疲れた様子が現れました。先ほどまではなかった汗が、薄く額に浮いてきたように見えたのです。

「賢子さん。今日はずいぶん長くお話ししましたから、だいぶお疲れになったことでしょう。ですから、あとひとつのことだけお話しして終わりましょうね。」

「すみません。やはり、疲れたようです・・・・。」

「賢子さんが、今までずっと感じてこられた、目に見えない、大きく優しいお方は、私が信頼している、天と地をお造りになったお方だと思います。つまり、普通、クリスチャンたちが神様と言って、礼拝していたお方です。私は先にも言いましたように、個人的に、神様と言うのに少し躊躇するのですが、他に適当な言葉がないために、とりあえず、神様とお呼びしましょう。実は、聖書で教えている天と地をお造りになったお方を、なんという日本語に翻訳したら良いか、翻訳者たちはずいぶん迷ったようですが、結局、プロテスタント教会では神様と言う言葉に落ち着いたようなのです。このことについての詳しいお話は後に回して、便宜上、神様とお呼びしておきましょう。」

　賢さんは、黙って頷いて下さました。

「どうか、いままで賢子さんが感じて来た優しく大きなお方が、天地をお造りになりお方だ、感謝を捧げるべきお方だと、はっきりと認めてお祈りをしてください。『天地をお造りになり、私をお造りくださり、生かしてくださっている神様。ありがとうございます。今まで私は、あなたのことをあまりよく知らないまま、あまり感謝も尊敬もしないままに来てしまいました。まことに申し訳ありませんでした。これからは、あなたこそ、私の感謝と賛美を受けるにふさわしいお方だと定めて、あなただけを礼拝し、あなただけに信頼し、あなたに私をお任せして生きて行きます。どうか、私を守り、祝福してくださいますように、お願い申しあげます。』」

　賢子さんの汗が少し濃くなっているのを見ながら、私は締めくくりに言いました。

「細かい言葉遣いなど、気にしなくてかまいません。天と地をお造りになった神様は、言葉がうまい下手ではなく、心を読み取ってくださるお方です。素直に感謝し、ほめたたえ、お願いをしてください。そし

て、神様の恵みと守りを体験してください。賢子さんのお祈りに、天と地を造り、賢子さんを造ってくださったお方は、必ず答えてくださいますから。」

目を閉じたまま、ほとんど無表情になった賢子さんのために、最後に短くお祈りをして、別れを告げました。

訪問第１０回目

賢さんは珍しく、ベッドの背を立てて体を起こしておられました。残暑にクーラーの涼風をわずかに感じながら、お祈りをささげて、お話を始めました。

「この前は、『神様』という言葉について、お話ししましたね。日本人が普通『神様』と呼ぶものと、私たちが本当に心に感じ、敬ったり尊敬したりしている大切なお方とは、別の存在であるということですね。私がお話ししようとしている方は、賢子さんも日本人の一人として、心の奥深くで感じて来られたに違いない、ありがたく、優しく、大きく、恵み豊かなお方についてだということです。実は、私たちも普通は、この方のことを『神様』とお呼びしていますが、それはあくまでも、日本語に適当な言葉がないので、とりあえず、翻訳として借用しているだけだということです。ここまでは、分かっていただけたでしょうか？」

「はい。とてもよく分かりました。私も、ずいぶん曖昧にというか、なんとなく『神様』という言葉を使ってきましたが、私が本当に大切にしてきたのは、自分の心で、かすかに感じて来た、大きく、強く、恵み深いお方であり、このお方が、聖書が教えている天と地をお造りになったお方で、クリスチャンたちが、『天の父なる神様』とお呼びになっているお方だと分かりました。

「そして、このお方こそ、私たちに命を与え、生かし、すべての必要を与えていてくださるお方です。この方は優しく恵み深いために、良い人たちにも、悪い人たちにも、太陽を昇らせ、雨を降らせてくださっているのです。」

「静かに、まじめに、自分の人生を考えてみると、本当にありがたいことだと思います。今はこんな病気になっていますし、時には、『神も仏もあるものか』などと、悪態をついたこともありましたが、不平や文句などは、言ってはおれないですよね。」

「不思議ですね。健康で、好き勝手なことをしていながら、不平不満ばかり言っている人もいるかと思えば、賢子さんのように、ベッドの上に寝たきりなのに、『ありがたい』と感じながら、生きて行ける人がいるのですから。・・・・でも、賢子さんは私たちとお会いするまで、その心に感じてこられたお方に向けて、はっきりと、感謝を捧げたことはありますか？　ありがとうございますという気持ちを、あきらかに表現したことはありますか？」

「そのように言われますと・・・・、あまりありませんでした・・・・。なかったと思います。」

「命を与えられ、必要なものすべてを与えられ・・・・思いめぐらせると、とても、とても、大きな恵みをいただいて来たのに、きちっと感謝もしていなかったということになりますね。」

「確かに、感謝の気持ちはありましたけれど・・・・・誰に向かって、どのようにしたらよいのか・・・・心の中で感じていた恵み深いお方の・・・・なんといいますか・・・そのイメージといいますか、お姿と言えばいいのでしょうか、感覚がぼやけていたものですから・・・・とにかく、はっきりしていなかったために、感謝の気持ちを、きちっと現わしては・・・・・来なかったのだと思います。」

　ゆっくりと、考えるように、賢子さんは言葉をつないでいました。

「あれほど大きな恵みと祝福をいただきながら、私たちの多くは、ほとんど感謝らしい感謝もせず、『ありがとうございます』とも言わなかったのは、たしかに、私たちの心に感じる天と地をお造りになったお方のイメージが、とても薄く、ぼやけていたからだと思いますが・・・・、やはり、これは『恩知らず』と言われても、言い訳が出来ませんね。あれほどよくしていただいたのに、『義理を欠いている』とも言えますね。あるいは、『親不孝』という言葉がありますが、私たちは天地をお造りくださったお方に『不孝』を重ねて来たのではないでしょうか。それなのに、まだ、このお方は忍耐深く、私たちから恵みを取り去ってはおられません。」

「そのように言われると、その通りですね。私たちは恩知らずで、不義理で、不孝を重ねていますね。でも、どうしたら良いのか分かりません。」

「そうですね。このような不義理、つまり、天地の創造者である方に本来するべき感謝をしてこなかった、本来、するべき礼拝も賛美もせず、きちっと敬意を払ってこなかったということは、やはり、大きな間違いだったと思います。これを、私たちはふつう、「罪」と言う言葉で表現します。私たちは天と地をお造りになったお方に、罪を犯してきたということです。」

「ああ・・、やっと分かりました。それが、キリスト教で言う罪なのですね。学生のころ、友人の一人が教会に通っていて、よく、『罪、罪』と言っていました。でも罪っていうと、私たちが考えるのは泥棒だとか人殺しですから、私には関係がないと・・・・。まったく無関心でした。」

「泥棒や殺人も罪には変わりませんが、それはどちらかと言うと、犯罪で、いま取り扱っているのは、それらの犯罪の根に当たる罪のことです。それは、自分をお造りになり、生かしてくださっていたお方を無視して、感謝もせず礼拝もせず、またそのお方が人間をお造りになった目的にも、少しの感心も示さず、勝手に生きて来たということなのです。親不孝、不義理、親の心子知らずというのと、同類ですね。」

　今日の賢子さんは、しっかりと目を開いて、きちっと受け答えをしておられます。

「ですから、いま、私たちにできることが二つ、いや、三つあります。一つは、不義理と不孝、恩知らずだったことをお詫びすることです。もう一つは、今日これから、このお方の素晴らしさを称え、感謝しながら生きることです。美しい花を観たら、『きれいだな～』だけで終わらずに、『こんなにきれいなお花を造ってくださった神様。ありがとうございます』と、神様に感謝をすることです。さらにその上、私たちにも神様に似た性質を与えて、神様がお造りになった美しいものを、美しいと感じる感覚を与えてくださったことも感謝しましょう。そのような素敵な神様をほめ称え、賛美することです。美味しいものを食べた時も同じです。感動することがあったときも同じです。太陽が昇り、朝露が輝くとき、感謝しましょう。縁側で鳴く鈴虫にも、小枝を飛び交う目白にも、感動するだけでなく神様をほめたたえて、感謝しましょう。」

「すべての美しいもの、すべての善いもののために、神様に感謝し、ほめたたえるわけですね？」

「その通りです。そうしていると、しだいに、美しいものや良いものにだけではなく、美しくないもの、悪いものにさえ、感謝ができるようになるのです。それは、感謝し、賛美する心を神様が祝福して下さり、私たちの心を変えてくださるからです。でも、まずは美しいもの、おいしいもの、良いものをたくさん思い出し、ひとつひとつ感謝し、賛美していきましょう。沢山ありますね。とてもとても、たくさんありますね。今日は日差しがさわやかです。緑が輝いています。白い雲もすがすがしく、雀のさえずりさえ楽しく聞こえます。さわやかに感じる心を感謝しましょう。輝く緑を見ることが出来る目を感謝しましょう。心地よく雀のさえずりを聞くことが出来る耳を感謝しましょう。」

「よく分かりました。どうせ、ベッドの上で何もできない私ですから、いろいろな美しいもの、おいしいもの、楽しかったこと、嬉しかったことを、たくさん思い出すことが出来ると思います。」

「それをひとつひとつ感謝して行って・・・・。」

私たちは同時に同じことを言いました。そして、笑いました。賢子さんが朗らかに笑う姿を始めて見ました。

「もう一つのことは、神様がお喜びになる生き方をすることです。それは、人間同士が互いに愛し合い助け合い、みんなが幸せになるように願いながら生きることです。」

「『互いに愛し合いなさい』と言うのが、キリスト教の基本的な教えだとは、どこかで聞きかじっていました。『罪、罪』と言っていた友人からだったかも知れません。」

「そうです。神様が人間に求めておられる大切なことの一つは、人間同士が愛し合い、助け合い、仲良く平和に生きることです。賢子さんは今、ベッドから起き上がるのも『やっと』の状態ですから、他の人のために何かをしてあげるなどと言うことは、無理かも知れませんね。でも、本当はとても大切なことが出

来るんですよ。たとえば、他の人たちのために、お祈りをしてあげることです。自分に良くしてくださった方たち、親切だった方たちの顔を思い出しながら、その方たちの幸せのために、健康のために、家庭のために、人間関係のためにお祈りをしてあげるのです。それから、自分に不親切だった人たち、迷惑をかけられた人たち、嫌いな人たちのことも思い出し、その人たちの幸せのためにも祈ってあげるのです。いやかもしれませんが、その人たちのために祈ってあげていると、不思議にその人たちを赦すことが出来、いやな思い出も良い思い出と変わってきます。それは、神様が祝福してくださるからです。それから、病院の人たち、お医者さんのために、看護師の方々のために、掃除に来てくださる方たちのためにもお祈りしましょう。そして、できるだけ笑顔で、・・・・・ちょっと辛い時も、できるだけ笑顔で、あいさつし、『ありがとうございます』と言ってあげましょう。それだけでも、みんな明るい気持ちになれるんですよ。その明るい気持ちが、さらに伝染して行くわけです。」

　真剣に聞いておられる賢子さんに励まされて、私は続けました。

「あんな嫌な人のために、お祈りなどできないと思うこともあるでしょう。でも、『敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい』と言うのがキリストの教えであり、神様がお喜びになることなのです。その出来ないことをしてみるのです。『あんたなんか大嫌い！　あっちに行って！！』と叫びたいところを、『いつもありがとうございます』と言ってみるのです。そのとき、自分の意志の力ではなく、神様に、『そのように言える心と勇気を与えてください』と祈りながら、言ってみるのです。すると、神様が助けてくださって、ほんとうに言えるようになります。そして、あなたの心が変えられ、やがて嫌いな人の心も変えられ、新しい人間関係が出来てくるのです。それが神様に喜ばれることです。決して自分の力でやろうとはせず、神様に祈りながら、助けられながらやることです。それが神様に対する信頼で、普通『信仰』と呼ばれるものです。自分の力だけでやろうとすると、必ず失敗します。神様に信頼して、つまり信仰を持って、やろうとすることです。神様が最もお喜びになるのは、人間に信頼されることだからです。」

「おっしゃる通りにしてみます。」

　賢子さんが約束して下さったのを聞いて、祈りの手本になるように、感謝と賛美と願いの祈りをしてお別れしました。

訪問１１回目

　一転して、賢子さんの顔色がよくありません。このところリハビリ病院で、明るく応答し、かなり話が進んだのですが、今日はお祈りをしただけで・・・・・、帰りました。帰り際にプレゼントですと、千代紙をたくさん折ってまとめた、大きなぼんぼりのようなものを持たされました。気分のいい時に、私たちに対する感謝の気持ちとして、何日もかけて作ったのだそうです。バックミラーのところに掛けてみましたが、大きすぎて運転の邪魔になるので、家に飾ることにしました。

訪問１２回目

またも賢子さんの容態が思わしくなく、病室の前でお祈りをしたまま、会わずに戻りました。

訪問 13 回目

リハビリ病院は、明るい色彩でまとめられていました。薬の副作用か、顔が丸く大きく腫れているようには見えましたが、元気な様子にほっとしながらお話ししました。

「この前は、ずっと昔から賢子さんが心の中で感じていた、気高く尊いお方に、感謝と賛美を捧げ、きちっとお礼をしてこなかったことを、お詫びすることについてお話ししましたね。それから、そのお方を褒め称え、信頼して生活すること、隣人を愛して行くことについても、お話ししました。しかも、それを自分の力でするのではなく、その気高いお方、つまりクリスチャンが天地の造り主として信頼しているお方にお祈りして、そのお方の力によって、そのようにさせてもらうということもお話ししました。いかがでしたか、やってみましたか？」

賢子さんは、ゆっくりと、落ち着いて、言葉を選ぶように話し出しました。

「はい。やってみました。毎日お祈りして・・・・、天地の造り主である神様を褒め称えました。感謝しなければならないことをたくさん思い出して、今まできちっと感謝をしてこなかったことをお詫びし、ひとつひとつ『ありがとうございます』と申し上げました。それで、ずいぶん自分が変わりました。たぶん、祈りに応えられたのだと思います。」

「それは良かったですね。今までは、ただ、なんとなく心に感じていた神様でしたが、今は、祈りに応えてくださる、身近な神様となりましたね。」

「ええ。それから、教えられた通り、お祈りして神様の助けをお願いしながら、他人に親切にできるように心がけてみました。」

「その結果、どうなりましたか？」

「はっきりとは言えませんが、まず、私の気持ちが変わったみたいです。それから、心なしか、私に接する人たちの様子と言うか、態度が変わったようにも思えます。」

「そうですか。確かに変化してきているのだと思いますよ。もっとそれがはっきりと現れてくるように、続けて行きましょうね。」

「なんだか、私はいま、とっても幸せな気持ちになっています。私は、大きく強く気高いお方に守られているんだなって、感じます。誰にも知られないで苦しんできたのではなく、このお方がすべてご存じだっ

たと思えて、・・・・病気のことも、手術の失敗のことも、何もかも神様がご存知なのだと思うと、深く安堵したというか、安心できるようになったんです。」

「それは良かったですね。少しずつですが、賢子さんは神様の力を体験しておられるのだと思います。天と地をお造りになったお方は、また、小さな雀までみ手のなかでお守りくださる神様だと、聖書に教えられています。そしてこの神様は、いわゆる、西洋から連れてこられた、キリスト教の神様ではありません。フランシスコ・ザビエルのスーツケースの中に入れられて、日本に運び込まれた神様ではありません。昔から、大昔から、天地創造の時から、日本にいてくださり、日本を祝福していてくださっていた神様です。多くの日本人が、賢子さんが感じておられたように、心の奥で感じて、良くは分からないままにも、崇め、崇拝して来た神様です。」

「そうですよね。私も、何か、とても懐かしい気持ちで、昔から知っていた優しいお方の、懐に飛び込んだような・・・・そんな感じがします。」

「キリストは、この神様を『天の父なる神様』とお呼びしましたが、まさに、長い間離れ離れになっていた、優しく強く大きな父親に再会して、その胸に飛び込むような心持が、神様を信頼することで、神様がお喜びになることなのです。聖書には、『神を愛する』ことが、人間として最も大切なことだと、教えられています。日本語では『愛する』と翻訳されていますが、なにか上から目線の表現に感じます。むしろ、『神様をお慕いする』と言った方が、日本語としてふさわしいでしょうね。『お慕いする』には、敬い、愛し、信頼するなどの深い意味がありますね。神様は、恐れたり、怖がったりするべきお方ではありません。恐れたり怖がったりするのは、神様のお心に反した生活をしているのではないかと、これも、ほとんど本能的に感じるからですね。」

「本当のところ、私も心の中で本能的に敬っていたように思うのですが、一方では、やはり本能的に恐れていたと思います。」

「そうですね。神を畏れ敬うという言葉があるくらいですから。やはり恐怖感もあったはずです。」

「どうしてでしょう？　神様は優しいお方のはずなのですが・・・。」

「これも今言いましたように、ほとんど、本能的な感覚でしょうね。優しいお方、恵み深いお方と感じていながら、一方では恐ろしいお方、怖いお方、近づきがたいお方と感じているのは、私たちに、自分ごときはこの気高いお方にはふさわしくない、自分は穢れている、汚いと感じているからではないでしょうか。キリスト教の信者に、頭ごなしに罪人呼ばわりされれば、『何を！俺は犯罪人ではないぞ！！』と腹も立ちますが、静かに自分を省みると、心の奥で感じている気高いお方の前に出るには、いささか汚らわしいと・・・・思うところもあるわけです。そんな日本人の心が、神社の手水舎（ちょうずや/てみずや）などに表現されているように思います。お参りする前に手を洗い口を漱いで、自分の穢れを洗い流すという意識だと思います。あるいは、流し雛などにも表わされているのだと思います。」

「流し雛って、今のお雛様の原型となった習慣ですよね。聞いたことがあります。」

「どのように聞いておられましたか？」

「たしか昔、日本人は、自分の身代わりとなる人形、つまり雛を作って、それに自分の穢れを乗せて、水に流したということだったと思います。」

「実際に雛が穢れを負って流れてくれたかどうかは別にして、日本人には、そのような強い穢れの感覚があったというわけですね。」

「そういえば、・・・私、大学時代の授業で、日本人には『恥』の意識はあっても、『罪』の意識はないと教えられたことがありましたが・・・・。あれはどうでしょう？」

「大変なことを思いだされましたね。それはたぶん、ルース・ベネディクトというアメリカの女性によって書かれ、戦後まもなく出版された『菊と刀』という、日本文化の研究書に書かれている事だと思いますね。アメリカ人による最初の日本文化の研究と言うことで、長い間、古典的な取り扱いを受けて来たものです。なかなか面白い分析で、たしか・・・人間関係を最も大切にして形成されている日本には、『恥』の意識は生まれても、絶対者の存在を前提としていないために、『罪』の意識は生じないというようなことを言っていたと思いますが・・・・。」

「でも・・・、キリスト教の神と言う絶対者の存在を前提としている欧米人が、その絶対者をどれだけ強く意識して生活しているか、はなはだ疑問にも思うのですが・・・。」

「そうですよね。多くの日本人は、キリスト教が言うような『絶対の神』の存在は知らなくても、気高く強く大きく正しい存在を、かすかにではあっても、心の中で、消すことが出来ない本能的な感覚として意識していていますね。だから、『誰が見ていなくても、だれに知られなくても、正しく生きよう』という、強烈な信念を抱くことも少なくありません。賢子さんは三浦綾子が書いた『氷点』という小説をご存知ですか？」

「ええ。人に勧められて読んだことはあります。三浦綾子は、クリスチャンでしたよね。」

「そうです。当時としては破格の賞金 1 千万円をかけて、朝日新聞が 1963 年に募集した小説です。私がクリスチャンになって間もなくのことであり、この小説の舞台が、私が暮らしたことのある村の隣村と言うことで、朝日新聞の連載を楽しみに読んだものです。この小説の中で、主人公の陽子が、継母から酷い虐待を受けながら、『石にかじり付いても』・・・・しがみついても・・・だったですかね・・・『正しく生きよう』と健気な決意をするところがあるのですが、まさに、そのような決意をさせたのが、天地の造り主である神の性質を与えられている人間の、本源的な、まさにマグマのように底の底から押し上げ

てくる衝動であり、その押し上げ突き上げてくるところが、日本人の魂の文化であると言うことが出来ると思います。

「実は、私もあの場面をよく覚えています。『石にかじりついても』だったと思います。」

「そうですよね。『石にかじりついて』が正しい日本語ですよね。罪の文化を持たないと言われる日本人の方が、陽子のように、非常に高度な倫理を固持し、その理念に従って行動をする場合が多いですね。たとえば、東日本大震災の時、あれだけたくさんの人たちが、あんなに大きな被害を受けながら、大変秩序のある行動をしていましたね。お店に暴徒が押し寄せて略奪するなどと言うことは、ありませんでした。あのような事態が起こると、キリスト教国と言われている国々でも、とんでもない略奪騒ぎになっていますね。警察だけでは足りなくて軍隊が出て来ても、あまりにも暴徒の人数が多過ぎて、何もできないというニュースをテレビや新聞で観てきましたね。」

「そういうときの、日本人って、とてもふしぎですね・・・・。何も東日本大震災の時だけではなく、そのような日本人の行動はいろいろな時に見られたと聞きました。戦後の満州からの引き上げの時の行動にもあったそうです。引き揚げ作業を管理していたアメリカ軍が、感嘆した話を読んだことがあります。」

「良くご存知ですね。私もその話は、何かで読んだことがあります。日本人は、いつも、絶対に聖く正しいお方が見ておられると、心の奥に感じていて、その感覚をぬぐうことが出来ないのだと思います。そして、そのお方の前に、自分は正しい行動をするのだという意識がとても強い・・・。」

「そういう点から考えると、罪意識はないと言われた日本人の方が、よほど強い罪意識を持っているのではないかと思いますよね。」

「だから日本人は、心に感じている気高く聖く正しいお方の前に出るには、自分はふさわしくないと感じています。それが日本人の罪意識でしょうね。あるいは穢れの感覚と言った方が良いかも知れませんね。日本人が本能的に感じているのは、罪よりも穢れでしょうね。日本語では、罪と言うのは表層的で、穢れと言うのは、もっと深くに存在する者のように感じますね。」

「でも、ちょっと不思議に思うのですが・・・・。お聞きしてよろしいでしょうか？」

　賢子さんは、「勇気を出して」と、自分に言い聞かせるように切り出しました。

「いままで私はずっとお話を伺い、教えられた通りに、自分の心で感じていた気高く大きなお方が、天と地をお造りになった神様だと信じるようになりました。そして、おっしゃる通りに、この神様を崇め、感謝をし、お祈りを捧げてきました。その結果、この神様が自分を祝福して下さっているというか、自分を守ってくださっていると実感でき、私の精神状態がずいぶん変わってきたと思います。それが、病院という小さな社会でのことですが、私の人間関係も変わってきたと思います。それには、また、私には永遠の

命が与えられているのだということが、現実的に、信じられるようになってきたことも、大きく関係していると思います。」

「そのことは、私も、お訪ねするごとに感じていましたよ。」

「でも・・・、私はそのお方を、聖く正しく、私など恐れ多くて近づけないお方であるとも感じて来ました。そして、その感覚は正しいものであるように伺ったように思いますが・・・・・。それならどうして、ただ、優しく恵み深く、人間の幸せを願い、祈りを聞き入れ、助けてくださるお方として、この恐れ多いお方に遠慮なく近づき、身勝手な祈りを捧げることが出来たのでしょうか。こんなことで、よろしいのでしょうか。どうして、私のようなものが、天と地をお造りになった大きなお方に、図々しく近づけたのでしょうか。懐かしい方に迎えられたような気持になれたのでしょうか？」

「賢子さん。あなたの疑問は、とてもとても大切なポイントというか、まさに、キリスト教の神髄ともいうべき点に、関わっています。キリスト教の『キリスト』という言葉は救い主と言う意味です。天と地をお造りになった神と言うだけならば、他の宗教、例えば、イスラム教やユダヤ教も同じように信じていますし、他にも、そのような宗教があるかもしれません。でもキリストすなわち救い主が、その神から遣わされて来てくださったと信じているのは、キリスト教だけです。

「キリストがキリスト教の特異性と言うことですね。」

「その通りです。このキリストと言う言葉は、キリストがこの世界に来てくださった当時、世界の共通語だったギリシヤ語ですが、キリストがお生まれになる前に書かれた旧約聖書では、主にヘブル語が使用されていて、『メシヤ』と呼ばれていました。『やがて救い主がおいでになりますよ』と言う励ましの言葉、あるいは予言の言葉として『メシヤ』が用いられ、人々の期待を集めていました。

「そういえば、世界メシヤ教という宗教もありますね。」

「あっ、あれは岡田茂吉と言う人が興した日本の新興宗教で、名前を借用しただけでキリスト教とは関係がありません。」

「そうでしょうね。なにか、私も違和感を持っていました。」

「それでは、このキリスト、あるいはメシヤ、・・・発音のしかたの問題で『メサイヤ』と呼ばれることもありますが・・・・」

「あっ。あのメサイヤという曲はそういう意味だったのですか！」

「よくご存じですね。ヘンデルが作曲した名曲ですね。メサイヤすなわちメシヤ、救い主、キリストです。

では、この救い主についてお話をしたいと思います。それから賢子さんが、どうして何にもしないまま、そのままというか、ありのままの姿で、聖い生活をしたり徳や金銭を積んだりしないままで、気高く聖いお方に近づくことが出来たのかも、お話ししましょう。・・・でも、今日はもうだいぶ長くお話をしていますから、お疲れになったと思います。キリストのお話は、またこの次ということにしましょう。今までと同じように、天と地を造ってくださった、大きく強く優しく気高いお方を賛美し、慕い、信頼して、お祈りを続けていてください。この素晴らしい造り主の祝福を感じながら、生活してください。」

「分かりましたそのようにいたします。」

　賢子さんは珍しく手を振って、見送ってくださいました。

第１４回目

　リハビリ病院では、きちっとした治療が出来ないということで、賢子さんは元の病院に戻っておられました。幸い個室に入ることが出来たようですが、以前に比べるとずっと狭く窮屈でした。それでも、周囲に気兼ねせず話しあえ、お祈りもできるのでほっとしました。

「今日は、救い主のお話をすることになっていましたね。キリスト教がなぜキリスト教と呼ばれているのかと言うことですね。」

「はい。キリスト教が、なぜキリスト教と呼ばれるようになったかです。それから、なぜ、私のような人間が、出家もせず、功徳も積まずに、天地をお造りになった気高く聖いお方に、近づくことが出来たかを教えていただくことになっています。」

　賢子さんは、私が何を話そうと思っていたかを、すでに良く知っておられたようで、その言葉には期待さえ感じました。」

「それから、今日は特別に、もう一人の方に来ていただきました。私たちの教会に来ておられる重子さんです。たぶん、賢子さんと同じくらいのお歳だと思いますから、共通の話題も多いことでしょう。それから重子さんはベテランの看護師さんです。看護婦と言われていた時からの看護師さんです。牧師の私からだけ話を聞くのではなく、普通の信徒の方から聞くのも役に立つと思いますよ。」

　そう言い残して病室を離れ、30 分ほど談話室で読書をしてから戻ってみました。二人の女性の会話は弾んでいるようでした。

「賢子さん。今日は重子さんと楽しくお話が出来たようですね。でも、お疲れになったでしょう？ 救い主についてのお話は、またこの次にしましょうか。賢子さんは、救い主についてはまだあまりご存じなくても、神様をきちっと信頼しておられるのですから、心配はありません。神様は賢子さんの知識によっ

て、お救いになるのではなく、神様を信頼する信仰をご覧になって、お救いになるのですから、安心してください。

「分かりました。今日は重子さんをお連れくださり、本当にありがとうございます。牧師ではなく、信徒と言う立場でのお話も、とても励ましになりました。キリストのお話は、この次に期待いたします。」

「これまでと同じように、神様を賛美し、お祈りを続けてください。神様の祝福をもっともっと体験してください。」

賢子さんの明るい声に励まされて、私たちは病室を後にしました。証をすることによって逆に励まされた重子さんが、とても感動している様子が新鮮でした。

訪問１５回目

前回、重子さんを連れて行って、思いのほか良い結果が得られたように思った私は、今度は、若いフィリピン人の女性を連れて行きました。明るく可愛いというより、美人系の彼女は、母国で良い大学を出た後、こちらで英語の教師をしていると言うことですが、何よりも、クリスチャン経験がしっかりしているので、賢子さんの励ましになると判断したのです。

「ハァ～イ！　ナイストゥミーチユウ！！」

明るいあいさつの後、なんのためらいもなく、横たわる賢子さんの上に覆いかぶさるようにハグした彼女に、賢子さんはとても驚いたようですが、くったくのない片言の日本語に心を開いたのか、機嫌よく迎えてくださいました。握手した手をそのまま激しく振る美人さんに、いささか心配しながらも、はにかんだ賢子さんの笑顔に励まされて、私は福音の中心主題に入って行くことが出来ました。

神の愛と聖さから始めて、救いの御計画、キリストの誕生とお働き、十字架の贖いと甦り、そして昇天と再臨、更には新天新地についてまで、神の救いの歴史について、ゆっくりと話すことが出来ました。何も心配せずに、人間の罪と堕落、神様に敵対した文化とその中に生きる人間、罪による悪魔の支配についても、語ることが出来ました。それから、人間に対する神のこよなき愛と、無代価の救い、すなわち信仰による救いと罪と悪魔からの解放と永遠の命について、充分に説明しました。賢子さんは、そのすべてを、素直に、そして真剣に聞いておられました。とくに、キリストの贖いに現わされた神の愛について聞いているときは、とても感動していることが分かりました。

「よく分かりました。」

長い話を聞き終えて、賢子さんは、はっきりとおっしゃいました。

「私は今日まで、天と地をお造りになった大きな神様について伺い、その神様を信じるようになってきました。その神様は、私がずっと前から、心の中で感じていた神様であることも分かりました。人間は神様に似せて造られているために、本能的に神様を感じ、礼拝したいという願いを持つことも理解しました。だから日本人も、大昔から神様を心に感じ、良くは分からないままにも崇め、祀ってきたのだということも納得できました。そしてその神様が、私たちを祝福し、必要なすべてのものを与えてくださっていることも、よく分かり、感謝をしてきました。太陽を見ても感謝、風を感じても感謝、花に触れても果物を手にしても感謝出来る人間になりました。」

「賢子さんの様子を拝見して来ましたが、今おっしゃったことがその通りなのだと、私も感じています。本当に良かったですね。」



誰かに差し上げて喜んでもらいたいと思えるようになった賢子さん。手先の器用さを生かしていろいろな小間物を造っています。この日は珍しく、車いすに座らせてもらえるほど、お元気でした。もう少し生かしてもらいたいと願っています。

「でも今日は、その神様が準備して下さった救いについて、まったく新しい分野について、教えていただきました。まるで、見えなかった目が開かれるように、とてもよく分かりました。救い主の誕生とお働き、特に十字架の身代わりの死についても、なぜそれが必要だったのか、とても良く理解できました。その救い主を通して現わされた、神様の比べようもない大きな愛については、ただ、感謝することしかできません。神様の救いが無代価でなければならないことも、その通りだと思います。お金で買うべきものでも、功徳と交換すべきものでもないことにも、納得ができました。本当に、こんなに尊い救いに、私たちは何をもっても充分な支払いはできません。ただ、感謝をして受け取る以外はありません。」

「その通りです。きっと納得していただけると思って、お話ししましたが、・・・・・ほかに、何か分からないところはありますか？」

「いいえ。お聞きしたことはどれもこれも、みんな、腑に落ちると言うべきでしょうか、よく分かります。何の疑問もありません。神様がどれほど私たちを愛していらっしゃるのか、とても言葉では言い表せないと思います。私たちは造られて、愛されて、守られていると思うだけで、感謝がいっぱい溢れてきますが、救い主を通して現わされた愛について知ると、ただただ、もう、何も言えなくなります。『ありがとうございます』と言っても、『もったいないことでございます』と言っても不充分です。

「分かっていただいて、私もとても嬉しく思います。それでは賢子さん、これからは、自分の本能的な神感覚に頼るだけではなく、もっとはっきりと神様について、救い主について、人間の生き方について教えられている、聖書に導かれる生き方をしましょうね。人間は神様の本性を写し与えられていますが、その本性は人間の堕落によってずいぶん曖昧になっています。ですから本性だけでは、神様を正しく理解することも、正しい信仰生活をすることもできません。それに対して聖書は、神様がご自分について、救いについて、人間の生活について、はっきりとお教えるため与えてくださったものです。今まで私は、この聖書によってお話しをしてきましたが、これからも、そのようにします。賢子さんも聖書を手に入れて、ご自分で読んでみましょうね。神様について、救い主について、もっともっとたくさん、しっかりと学んでいきましょう。そしてますます、神さまに信頼する生き方をして参りましょう。

「はい。どうぞよろしくご指導くださいますように、お願いいたします。」

　私と家内は、仰向けになったまま組んだ賢子さんの手を取って、一緒に感謝の祈りを捧げました。「アーメン」と言って目を開けると、喜びと平安に包まれた賢子さんの笑顔がありました。

終わりに

　賢子さんに始めてお会いしてから、もう 1 年半ほどにもなります。とてもしっかりとした信仰告白をしてからも、彼女はずいぶんひどい目に遭いました。法律が変わったとかで、長期間の入院が出来なくなり、2 度退院させられました。自宅に戻った彼女を幾度も尋ねましたが、寝たきりのために、窓越しにお話しできたのが一度だけです。その 2 度の退院中に 2 度の骨折をしました。お会いしてから、合計 3 回の骨折です。さらに無理な点滴中に細菌に感染したのか、（静脈が細く、最も太い場所といわれる鎖骨の後ろの部分に点滴を入れていた。これは感染症を起こしやすい）骨折の時の傷口から感染したのかよく分かりませんが、両足に壊死がはじまり、切断しなければならないとも言われました。壊死は骨にまで達していましたが、部分的に切除するだけで済みました。幸い、今のところそれ以上進行せずに、切り取ったところに肉が盛り上がって来ています。あまりの痛さに、面会できないことも幾度かありました。

　でも今週お会いした時は、イエス・キリストを通して神が準備して下さった救いについて、1 時間ほども、組織立ててお話が出来ました。お別れの前に、彼女は無理してベッドに起き上がり、私たち夫婦にプレゼントをくださいました。私たちそれぞれの誕生石と真っ赤なバラが入った、飾りの置物です。石はイミテーションですが、バラは本物を特別な方法で保存しているものでした。

　次の日曜日には、教会に持って行って、信徒たちに見せたいと考えています。交わりには一度も来ることが出来ないままですが、信徒たちは名前を挙げて祈っているからです。彼女も、私たちの教会の一員と理解されているのです。